

## フランスにおけるエコミュゼの運営と学習プログラム

赤澤宏樹<sup>1)</sup>\*・嶽山洋志<sup>1)</sup>

### The Management and Learning Programs of Ecomusee in France

Hiroki AKAZAWA<sup>1)</sup>\*・Hiroshi TAKEYAMA<sup>1)</sup>

#### 要 旨

本稿では、フランスのエコミュゼの館長および地方圏のエコミュゼ担当者に対して実施したヒアリングの結果から、ひょうごエコ・ネット・ミュージアムの構築に資するエコミュゼの運営手法と学習プログラムを整理した。

各エコミュゼでは、フランスの市民団体であるアソシアションを中心に市民と協働するとともに、観光や雇用など各種団体とも連携し、文化・遺産や自然・環境に関連する広報・普及・実践活動を進めていた。また、エコミュゼを支援する地方圏政府は、協約をもってエコミュゼの運営管理と資金援助を行うが、各エコミュゼの経営については努力は求めるものの、「文化を図る指標にならない」との理由で採算性は重視していなかった。

キーワード：エコミュゼ、運営、学習プログラム、市民の協働

#### はじめに

人と自然の博物館では、企画展示やセミナー、観察会などの魅力あるプログラムをセットにし、地元住民と共にプログラムを展開するキャラバン事業を、2002年度より実施している。本事業の方向性としては、実施主体が県下に散在する博物館相当施設などを核とした地元に移り、そこと人と自然の博物館が人・物・情報ネットワーク提携を結ぶといった「ひょうごエコ・ネット・ミュージアム」をつくることにある。この構想は、人の生活を含めた地域の自然・環境を未来へ継承することを目的とし、県民の参画と協働による推進を主な手法とする。

これに近い形態を持つものに、フランスのエコミュゼがある。エコミュゼは、日本ではしばしば「野外博物館」として紹介されることもあるが、本来は文化や産業、環境、生活といった地域の総体を保存し理解してもらうことを目的とし、それらを通して文化振興や二次的な経済振興に寄与することを特徴とする。また、エコミュゼが成立する背景には権利と責任を伴う「近代市民」の思想

があり、今後の我が国における参画と協働による施設運営の参考にもなる。

そこで本稿は、2004年1月にフランスに渡航し、後述する3つのエコミュゼの館長および地方圏のエコミュゼ担当者に対して実施したヒアリングを通じて得られた、フランスにおけるエコミュゼの運営手法および学習プログラムから、ひょうごエコ・ネット・ミュージアムの構築に資する知見を整理することを目的とする。

#### エコミュゼの概念

##### エコミュゼの語源・目的

エコミュゼは、1960年代の後半にフランスの博物学者リヴィエールにより提唱された、「エコ(生態学・経済学)」と「ミュゼ(博物館)」を組み合わせた造語である。「エコ」は単なる生態的な意味にとどまらず、地域の経済的な活性化も図る概念であると捉えられる。リヴィエールは、エコミュゼの目的を「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境の発達過程を史的に探求し、自

<sup>1)</sup> 兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント研究部 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Environmental Management, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

\*兼任：姫路工業大学 自然・環境科学研究所 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Institute of Natural and Environmental Sciences, Himeji Institute of Technology; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする」としている。さらなるエコミュゼの詳しい概念については、これまでに数多くの整理がなされている（大原，1999，新井，1995，新井，1997）ので、本稿では省略する。1990年代のバブル経済の崩壊後から、日本各地でも地域づくりの一手法としてエコミュゼの概念が用いられるようになり、兵庫県でも上山高原や北播磨地区などでエコミュゼ活動が展開されている。

## エコミュゼの構成

### 組織形態

エコミュゼの組織形態には2つのタイプが存在する。一つは特定地域の中にコアとなる活動拠点を有しそれとサテライトがネットワークで結ばれるタイプ、もう一つはサテライトが独立した運営組織であるアソシアシオンを形成し、エコミュゼのコア組織と契約を結ぶタイプである。元々エコミュゼは前者のタイプが多く、コアのミュージアムが情報の収集や伝達、エコミュゼ全体の企画・運営を担い、サテライトのミュージアムでは主に各地域に残る自然・歴史・産業などの遺産を活用した学習プログラムの実施を担っていた。現在では後者の形態で、アソシアシオンがサテライトのミュージアムにて独立した運営を担っている地域が多い。

### 「1901年法」に基づくアソシアシオンとエコミュゼ

フランスには日本のNPOに似たアソシアシオンという市民団体があり、いくつかのエコミュゼの母体となっている。このアソシアシオンは、1901年に制定された「アソシアシオン契約に関する1901年7月1日法」(Loi du 1er juillet 1901 relative au contrat d'association, 本稿では一般的に略称として用いられる「1901年法」とする)によって成立する。1901年法の第1章第1条に「アソシアシオンとは、2名以上の者が、利益の分配以外の目的のために、自分達の知識や活動を恒常的に共有するために結ぶ合意のことである。(彦江訳)」(コバヤシ, 2003)とあるように、アソシアシオンとは個人間の契約であり、市民の社会に対する義務と対をなす「協働する権利」である。

本稿に記載する3つのエコミュゼの運営には、このアソシアシオンが少なからず関わっている。中でもクルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼは、設置は都市共同体によるものの、運営は設立当初からアソシアシオンによって自主的に行われた点で他のエコミュゼに影響を与えている。館員の何人かはアソシアシオンによって雇用されていることから、地域の文化を継承するエコミュゼの中でのアソシアシオン、すなわち市民の占める

重要性がわかる。また、フルミ・トレロン・エコミュゼは、エコミュゼ設立前から存在していた学校関係者や高齢者によるアソシアシオンや、その他文化的なアソシアシオンから得た様々な情報によってエコミュゼ設立の基礎ができ、設立後も古写真に関する記憶の収集作業などをアソシアシオンと共に進めている。このように、アソシアシオンによる協働の活動は、エコミュゼの設立、経営、事業実施などの個別の内容に固定されることはなく、各エコミュゼにおいて必要な形態をとる。

1901年法に基づくアソシアシオンは、各自の興味にしたがって自分達の知識や取り組み能力を提供し、地域の文化、生活様式、遺産、環境などの過去と現在、現在と未来との関係を伝え継承する。エコミュゼが地域を総体として研究・展示・保存・活用するためには、このように地域を最も古く詳しく知る市民との協働が必要不可欠であり、アソシアシオンはその手法として有効な契約形態であると言えよう。

### 人材

エコミュゼの組織を考える上で重要なことは、設置が義務づけられているコンセルバトゥール（主任学芸員）の存在である。彼らは主にパリの国立文化遺産学校を修了し、考古学などの修士もしくは博士の学位を有し、国の責任において文化省より派遣されるスタッフである。彼らは単に学芸員としての資料の収集・整理、来館者へのサービスだけでなく、フランス政府からの予算確保や行政機関との調整などエコミュゼ全体の経営も担うために、政治的な能力をも要求される。

この他にもアニマトゥール、インストラクター、ボランティアなど多様なスタッフをエコミュゼでは有している。アニマトゥールは「社会、教育、スポーツ、文化の活性化にあたる専門職員」で、その資格は青少年・スポーツ省や国家教育省、アソシアシオンなどから与えられる。学校の教員とは異なり、共に活動をすることで子どもの主体性を芽生えさせるところに特徴がある。インストラクターは主にエコミュゼにおけるプログラムの指導を担い、アニマトゥールと近い存在である。ボランティアはエコミュゼには欠かすことが出来ないスタッフで、高齢者が中心になって活動を展開している。

## 調査対象地の特徴

### 位置と特徴

図1に調査対象地の位置を、表1に調査対象としたエコミュゼの特徴を示す。

### ヒアリング結果の分類

今回の行程では、フランスにおけるエコミュゼのマネ

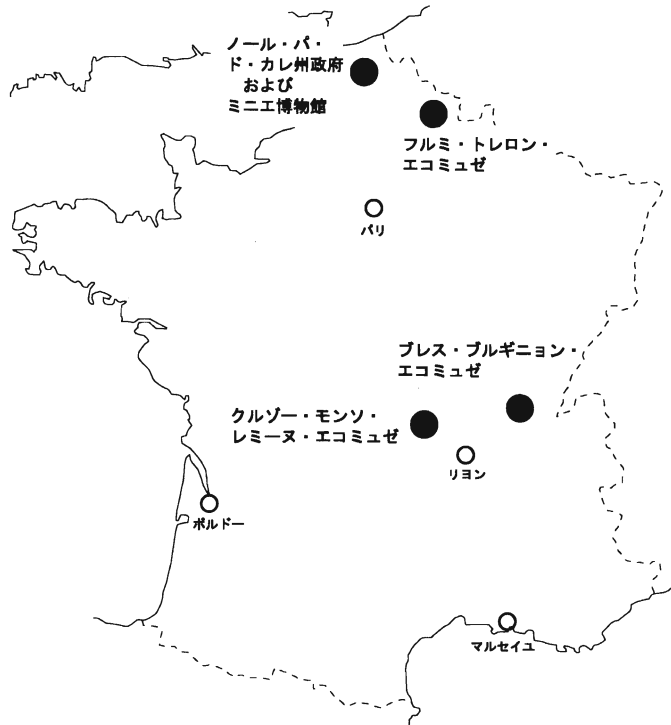


図1 調査対象地の位置

エコミュゼ	面積 (km <sup>2</sup> )	人口 (人)	エコミュゼ設立以前の産業	概要
プレス・ブルギニオン	1,690	70,000	農業	若者の流出、農業市場の変化などで、プレスブルゴーニュ地域は新たな活動や収益性を見込める農業の方法を探求することになる。その延長線上にエコミュゼがあった。
クルゾー・モンソ・レミーヌ	500	150,000	石炭・鉄鋼業	ヴァリール、リヴィエール、地域の産業遺産を未来に繋げていこう、という意味をもった住民によって、エコミュゼはつくられていった。
フルミ・トレロン	600	40,000	羊毛織物・ガラス産業	M. クジャーール氏がエコミュゼを提案し、活動をはじめた。活動の目的は、住民たちに、地域の産業に対する誇りや自信、記憶を取り戻させることにあった。

表1 調査対象としたエコミュゼの特徴

	国・地方圏からの支援	経営	組織	人材	学習プログラム
プレス・ブルギニオン・エコミュゼ	●	●		●	●
クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼ		●			●
フルミ・トレロン・エコミュゼ		●	●		●
ノール・パ・ド・カレ地方圏政府	●	●	●		

図2 調査対象とヒアリング内容の対応

ジメントの手法から人と自然の博物館のエコ・ネット・ミュージアム構想の実現・運営に資する知見を得ることを目的としたため、ヒアリング内容をエコミュゼの運営として「国・地方圏からの支援」、エコミュゼの「経営」、エコミュゼの「組織」、エコミュゼの「人材」の4項目と、エコミュゼの「学習プログラム」の全5項目に整理した。図2に本稿で扱う調査対象とヒアリング内容の対応を示す。

### エコミュゼと地方圏政府の事例

#### プレス・ブルギニオン・エコミュゼ

図3にプレス・ブルギニオン・エコミュゼの構成地図を示す。

##### (1) 国や自治体からの支援

プレス・ブルギニオン・エコミュゼがあるブルゴーニュ地方圏では、1982年に学習プログラム「遺産学級」が設

置された。フランス政府から提供されるプログラムの多くが古典的である中で、「遺産学級」はブレス地方固有の環境学習であることから、ブルゴーニュ地方圏政府から全体の50%にあたる15ユーロ／人日の資金援助を受けている。

## (2) 経営

エコミュゼの館長は、どう人を呼び込むかといった努力を怠らない。毎週ラジオ番組で広報する他、地域の旅行関係者によって「エバージョン・プラス」というネットワークをつくり、地域内の施設で連携しながら広報している(図4)。

入館については、半額となる5ヶ月分パスポートや年間パスポートなど、様々なプログラムが受けられるような仕組みをつくっている。この仕組みは、来館者を増やすために作ったのではなく、現在の3万人／年の来館者を長期に渡って維持するためのものである。来館者数は展示の方法にも影響するため、現状の人数であればコンパクトで触って楽しめる展示が維持できるのである。

## (3) 人材

ブレス・ブルギニョン・エコミュゼの中心となるのは、コンセルバトゥールでもある館長である。館長の仕事は、行政との調整役が中心である他、ラジオ出演など広報活動もこなすが、来館者に対して環境学習を行う機会は少

ない。

各種の学習プログラムを実施するスタッフとしては、1クラスに1人有償のインストラクターが付く他、環境や森林、湖水などを担当している行政関係者が無償でコーディネーターとして付く。また、実際に児童の活動を補助するアニマトールは、国や地方圏のみで運営されるミュゼ(博物館)では雇用できず、アソシアシオンやコミュニティによって運営されるエコミュゼでのみ雇用できる。この他にボランティアスタッフがいるが、ボランティアスタッフはコンセルバトゥールやインストラクターによる研修を通して養成されるのではなく、経験者から新人への直接の伝達によって仕事を覚えていく。これは、前述したようにエコミュゼではコミュニケーションを重視する学習プログラムを実施することが影響しており、その他のスタッフも含めて単に自然や歴史についての深い知識を有する人間ではなく人とコミュニケーションのとれる人材を採用するという。

## (4) 学習プログラム

ブレス・ブルギニョン・エコミュゼの学習プログラムを表2に示す。

ブレス・ブルギニョン・エコミュゼは、主に学校と連携した教材開発、滞在型、子ども向けの3つのプログラムを実施している。学校連携プログラムでは、ブレス地方の農業や樽職人の作業などを収録した映画や森や学校

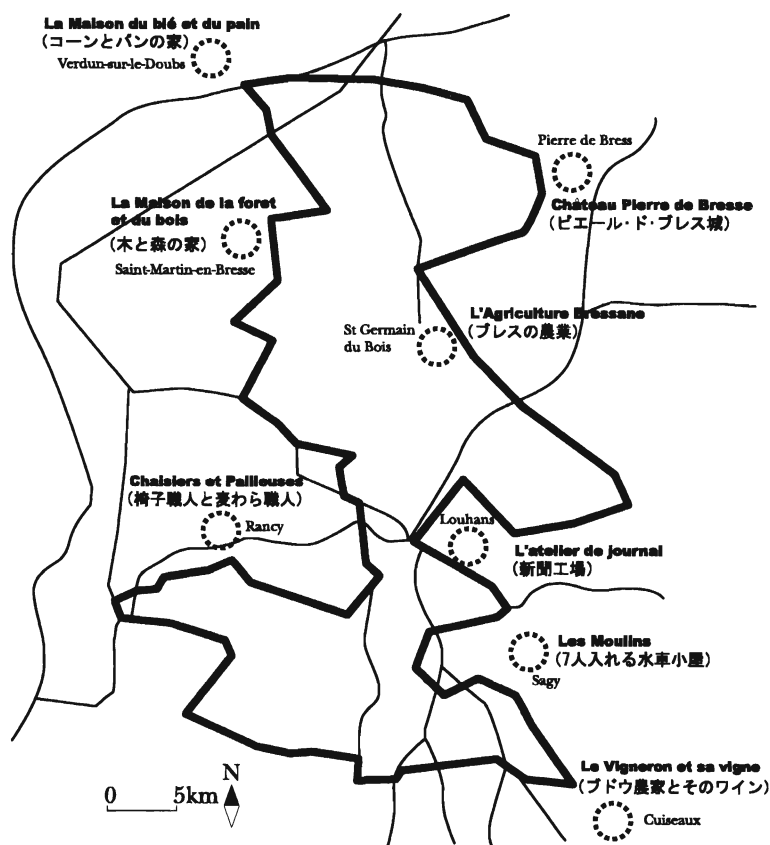
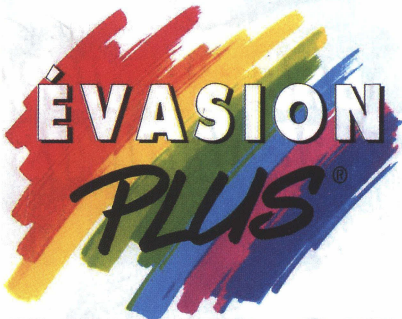


図3 ブレス・ブルギニョン・エコミュゼの構成地図






**ÉVASION  
PLUS®**

**14 high-quality  
sites to visit**

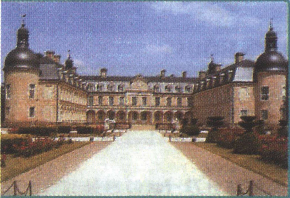
[www.evasion-plus.com](http://www.evasion-plus.com)  
e-mail : [info@evasion-plus.com](mailto:info@evasion-plus.com)

**BRESSE JURA  
BEAUJOLAIS**




FRANCE

GB



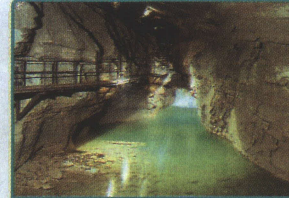
**1** **ECOMUSEE DE LA BRESSE BOURGUIGNONNE**

Tél 03 85 76 27 16  
Fax 03 85 72 84 33




**2** **MAISON DE LOUIS PASTEUR**

Tél 03 84 66 11 72  
Fax 03 84 66 12 85




**3** **GROTTE DES PLANCHES**

Tél 03 84 66 07 93 / 03 84 66 13 74  
Fax 03 84 66 07 93




**4** **CHATEAU DE JOUX**

Tél 03 81 46 48 33  
Fax 03 81 69 47 95 (en saison)




**5** **ARCHEOLOGIE DEPARTEMENTALE  
DU JURA**

Tél 03 84 47 12 13 - Fax 03 84 24 30 34




**6** **FERME DE L'AUROCHS**

Tél 03 84 25 72 95  
Fax 03 84 25 77 14



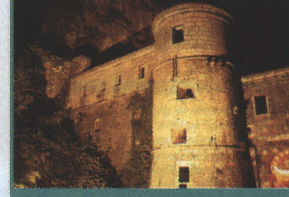
**7** **MUSEE DU JOUET - MOIRANS**

Tél 03 84 42 38 64  
Fax 03 84 42 38 97



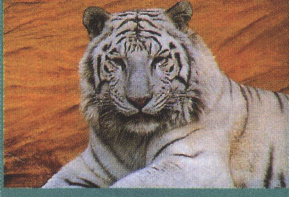
**8** **TELECABINE DE LA FAUCILLE**

Tél/Fax 04 50 41 48 54



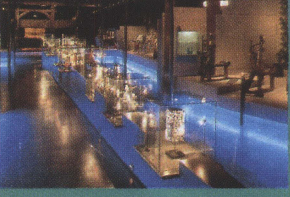
**9** **FORT L'ÉCLUSE**

Tél 04 50 59 68 45  
Fax 04 50 56 73 18



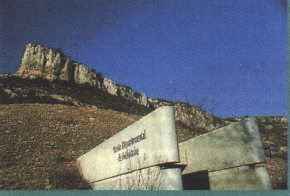
**10** **TOUROPARC**

Tél 03 85 35 51 53  
Fax 03 85 35 52 34




**11** **LE HAMEAU EN BEAUJOLAIS**

Tél 03 85 35 22 22  
Fax 03 85 35 21 18




**12** **MUSEE DE PREHISTOIRE DE SOLUTRE**

Tél 03 85 35 85 24  
Fax 03 85 35 86 83




**13** **HOTEL DIEU DE LOUHANS**

Tél 03 85 75 54 32  
Tél OTSI 03 85 65 05 02



**14** **CHATEAU D'ARLY - JURAFaune**

Tél 03 84 85 04 22  
Fax 03 84 48 17 96



DIJON, BESANCON, LAUSANNE, GENEVE, SANNICY

Créé Révisé par réduction de la carte IGN 1:1000 000 n° 901 © IGN - Paris 2000 - Autorisation n° 50 - 0023


図4 エバージョン・プラスのリーフレット



学校連携プログラム(教材開発)

	テーマ	内容
映画	プレス地方	エコミュゼとその関連施設を通じ、ラ・プレス地方の様々な面を紹介する。
	プレス地方の森	製材工と農業従事者が「黒い滑り台」という古い技術に従って、1本のカシワの木を倒す。
	馬の匂い	プレスの馬方が現在の農作業でのぼんばの使い方について語る。
	たくましいティエボー	プレスの樽職人が樽の製作の様子を見せる。
	プレスの最後の刃物製造工	この職業の変遷と“バスロン”と呼ばれる草刈り鎌の製造の工程を紹介する。
	豚の屠殺	プレスの屠殺人がまだ行っている方法をそのままに行う。
	とうもろこしへの情熱	様々な証言に基づく、プレスでのとうもろこし栽培の多様性の紹介。
	椅子職人の仕事	プレスでの藁張り椅子の製造と、グローバル化という現状における椅子職人の位置について紹介。
	小麦とパンへの賛辞	小麦、小麦粉、パンの製造工程の記録とノウハウ
教育用パック	森	動物の声のカセット、木の見本、エッセンスの瓶、教育用カード、様々な資料を使って、テーマの知的・感覚的・芸術的アプローチにより森の世界を生徒にみせる。
	学校	20世紀初頭の小学生が持っていたモノの一式の完璧なセットを提供する。また、エコミュゼの見学をより良いものにするために、教員の方々に大きな図書室を開放。動物、建築、料理などテーマは多岐にわたる。

滞在型プログラム(連続5日)

対象	料金	写真
小中高校生	30ユーロ/参加者1人	
内容		
ピエール・ド・プレス城に宿泊し、エコミュゼやサテライトを見学する。オプションとして以下のものがある(別途料金)。		
森林博物館	プレスの森を通り抜け、様々な種類の樹木の解説や村での木工職、ペリニー広場の自然体験などが行われる。	
プレスの農業	プレス地方の農業活動を地元生産の初期のトラクターや馬を使った脱穀などを見学・体験する	
椅子職人と藁張り職人	ランシーにおける椅子製造の起源と変遷に関する展示から、今日の企業と雇用、伝統的な藁張りのデモあり。	
小麦とパンの博物館	7000年に渡る栽培と4000年に渡るパン作り、製粉業の歴史、「パン屋稼業」の技巧など。パン作り実習もある。	
ブドウ栽培者とブドウ畑	家具、道具、樽職人の工房の工具展示、樽の製造を追った映画の上映などが行われる。	

子ども向けプログラム

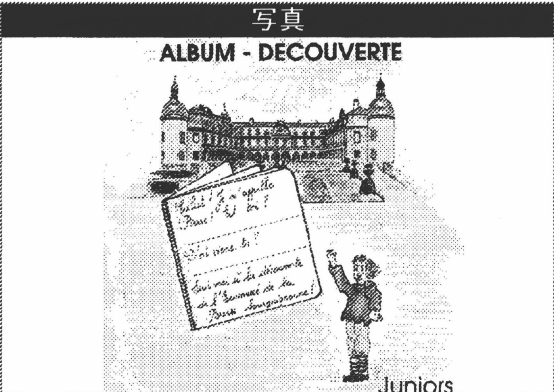
対象	料金	写真
子ども	-	
内容		
子ども向けの教材として開発され、エコミュゼの現場で活動する際の視点とスケッチシートが付いている。		
大地	農具の使い方を農業従事者に聞いたりする。	
森	葉の名称カードを持ってその樹木を探しに行ったり、森の中の獣道を探しに行ったりする。	
水	池や川などで実際に魚を釣ってその種類を記録したり、漁業の道具について調べにいたりする。	
経済的な生活	子ども達の持ち物の会社名を答えたり、食品売り場でセーユ溪谷地方の製品を見つけ出したりする。	
建築物	建築で使用されている円弧の形状の数をカウントしたり、写真を撮ったりする。	

表2 プレス・ブルギニオン・エコミュゼの学習プログラム

をテーマにした様々な教育用のパックを提供している。滞在型プログラムは主にエコミュゼ内の各サテライト見学が中心であり、脱穀やパン作り実習など体験型プログラムから構成されている。これに関連して、ブルゴーニュ地方圏政府の援助を得て「遺産学級」という合宿をしながら参加者全員でプレス地域の資産について学ぶプログラムも実施している。子ども向けプログラムには、子ども達がエコミュゼ内の現場で活動する際に楽しく過ごせるよう、自然や建築物、暮らしなどのテーマが設定されており、それをエコミュゼ内で調査をする。このプロ

グラムはクイズ形式になっており、子ども達は実際に川で魚釣りをしたり農業従事者にヒアリングをしてクイズの解答を得て、館内の展示で答え合わせをするという構成になっている。

他には、特別展に関連するプログラムとして芸術工房の見学や展示に関連する制作作業があり、アラカルトでできる活動としては昔のプレス風遊びや城に隣接する県立公園の散歩などが実施されている。

以上のように、プレス・ブルギニオン・エコミュゼの学習プログラムは、コミュニケーションを中心に構成さ

れている。10年ほど前までは本館やサテライトの展示が故障していても参加者から全く文句がでなかったほど、コミュニケーションによるプログラムが充実している。年間3万人の来館がある中で、6000人の児童来館者のうち1000人がこのような宿泊型のプログラムに参加する。

### クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼ

クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼは、1972年に設立された人と産業の博物館を中心に、1974年に法的に位置づけられた産業がベースとなったエコミュゼである。現在は全5箇所サイトのからなり、それぞれの特色を生かして運営している。図5にクルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼの構成地図を示す。

#### (1) 経営

エコミュゼ全体としては、設立当初は新しい取り組みとして脚光を浴び、国からも予算を確保し、職員を20名まで増員した時期もあった。しかし、エコミュゼとしての広範な理念は確かなものであったが、それを実現する手法がなく、1980年代の経済危機を経て職員が5名まで減少する事態に至った。問題は、エコミュゼの管理の問題から経理、人間にまで至り、他のエコミュゼとの競争による収入減も影響した。

そこでエコミュゼのテーマを産業の歴史に絞り、経営

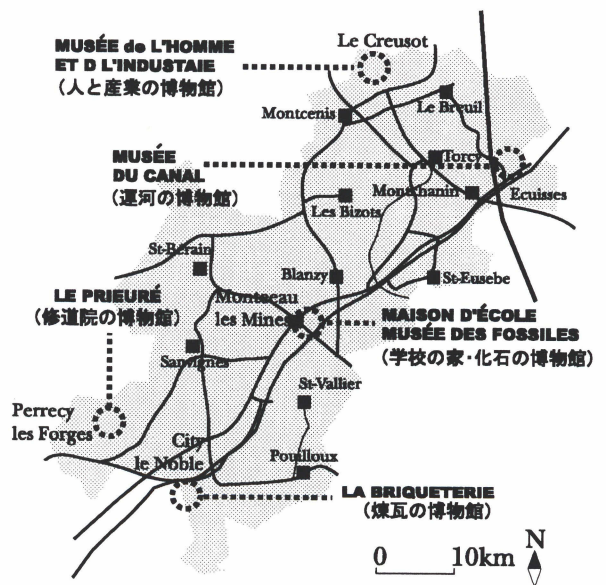


図5 クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼの構成地図

危機を乗り切る戦略をとった(写真1)。現コンサルパトゥールのPatrice NOTTEGHEM氏は、自身の専門は生物学であるが、エコミュゼの経営のためには産業の方が可能性があると判断したのである。1990年代始めにクリスタルの工場(写真2)をつくることによってテーマを明確に打ち出す一方、産業構造の転換に伴う企業の宣伝をエコミュゼで実施するなど現状の産業へも柔軟に対

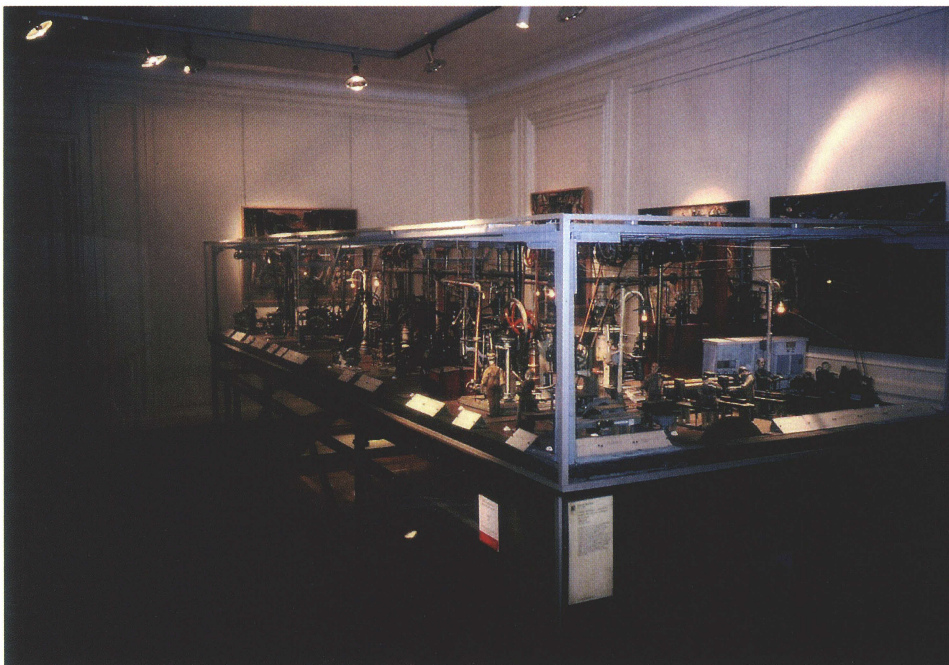


写真1 地元職人が作った産業機械の展示





写真2 クリスタルの工場



写真3 修復中の「煉瓦の博物館」



写真4 「煉瓦の博物館」での修復作業



写真5 当時の機械で作られる煉瓦



応した。また、職員の何人かが地元のコミュニティから雇用されていることもあり、エコミュゼの目標をテリトリーの住民に対するサービスとして明確に進めた。サイトを中心部に集め効率化を図るのではなく、テリトリー内で広く分布させているのは、住民へのサービスとそれによる意識の波及を意図したものであるという。

現在は経営が軌道にのってきたこともあり、2004年から自然科学の中でも生活者に身近で興味をもたれる「水」をテーマに動物的、植物的なアプローチでエコミュゼを展開する予定である。これまでは経営的な判断で産業に特化した事業を進めてきたが、Patrice NOTTEGHEM氏は「自然と文化は本来分かれていないし、産業の歴史だけを扱うことは政治的にも難しい」と言う。

## (2) 学習プログラム

クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼのサイトのひとつである煉瓦の博物館 (La Briqueterie Ciry-le-Noble) は、1893年に建てられ1960年代に閉鎖されたものを、1995年にコミュニティが購入したものである。現在は、建築物を修復しながら内部の展示を徐々に作っている段階である(写真3)。ここでは産業遺産として煉瓦製造の機械を保存するだけでなく、成人職業訓練協会 A.F.P.A (Association pour la Formation Professionnelle des Adultes) と提携してエコミュゼの施設を修復・保存することを職業訓練のプログラムとして実施している(写真4)。このA.F.P.Aのプログラムでは、若者の専門能力を養成し、修了生の63%が次の仕事を獲得している。

通常の職業訓練では、訓練によって作られた建築物などは終了後に壊されることとなるが、この煉瓦の博物館

では訓練の結果がそのまま残ることとなる。このように「教育(訓練)」と「修復(復元)」を同時に行っているのは、フランスでもクルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼだけである。これらのプログラムによって復元された煉瓦工場は、工場の中心にある材料から蒸気機関によって動くプロペラシャフト、建物と同じ高さの窯まで全てが展示であり、20世紀初頭の煉瓦産業の全てを体験することができる。また、来訪者に対して、実際に使われていた煉瓦製造の機械を用いる煉瓦づくりのデモンストラーションも行われる(写真5)。

## フルミ・トレロン・エコミュゼ

フルミ・トレロン・エコミュゼは、フランス北部のノール地方にある紡績工場を中心としたエコミュゼである(写真6)。図6にフルミ・トレロン・エコミュゼの構成地図を示す。

### (1) 経営

フルミ・トレロン・エコミュゼの収入内訳は、自己収入が25%、補助金が70%、寄付が5%である。25%の自己収入のうち5%を占める売店(写真7)の売り上げは平均1.8ユーロ/人であり、来館者の47%が購入している。購入者の内訳は、80%がエコミュゼの見学者で、10~20%は地元住民である。この売店とカフェは、アソシエーションが経営している。

寄付は地元のテキスタイル会社、ガラス工場、食品会社、銀行やコミュニティなどから得ている。その謝意として、寄付企業のロゴのパンフレット掲載や、サイン会の開催を行っている。

エコミュゼ全体としては、2000-2001年の2年間のみ

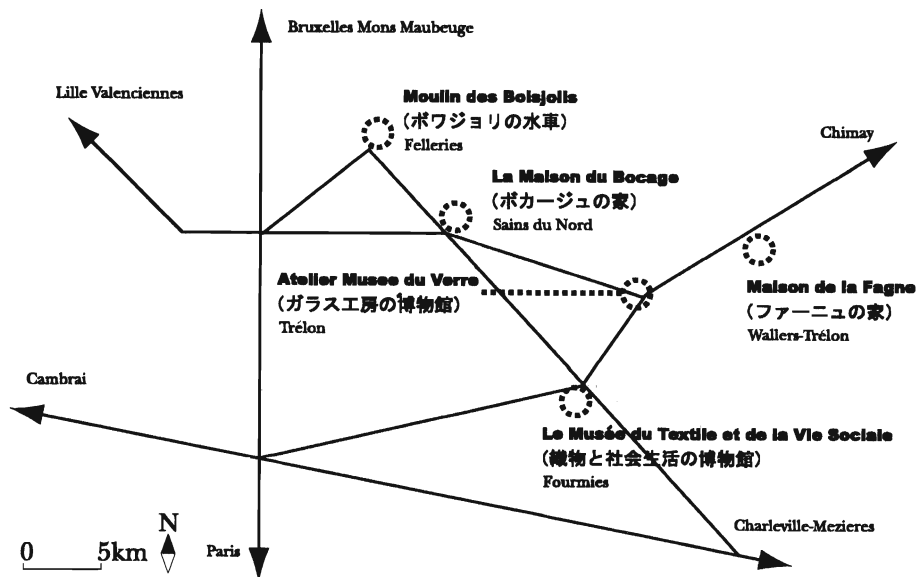


図6 フルミ・トレロン・エコミュゼの構成地図

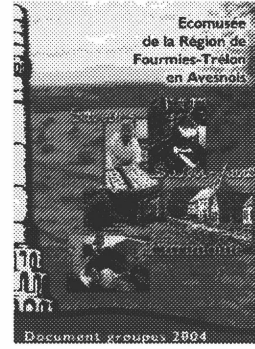


写真6 フルミ・トレロン・エコミュゼのコア施設



写真7 「織物と社会生活の博物館」内の売店

一般向けプログラム

対象	料金	写真
一般	大人:2.5~5, 子ども:1.6~2.5ユーロ	
内容		
<p>いろんなエコミュゼの施設における展示を用いた体験プログラム</p>		
紡績と社会生活の博物館	羊毛などの毛を使った生地, 紡績技術を知る. 昔の人々の生業や糸紡ぎの機械の仕組みを学び, 紡績体験も出来る.	
ガラス工房の博物館	ガラスの加工現場をみるとともに, スタッフによるデモンストレーション, グラスへの模様付け体験などが楽しめる.	
ポカージュの家	ポカージュでの特産の食べ方や作り方の手法を学ぶ. それと同時に田舎の心の温かさに触れるプログラム.	
かご職人の家	かご編み職人のパスカル氏が職業の秘密や柳の枝について教えてくれる.	
チーズ職人	アヴェノバ地域ではチーズの生産においても優れており, チーズの出来方やチーズを使った料理を楽しめる.	

子ども向けプログラム

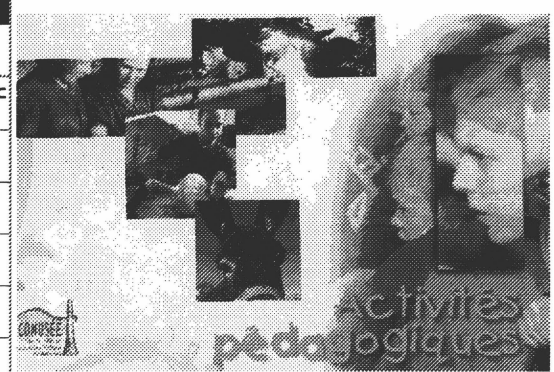
対象	料金	写真
子ども	-	
内容		
<p>大衆文化における教育的側面から様々なアクティビティを展開している. 特に自然の偉大さを学ぶプログラムには専門スタッフ付で学べるようになっている</p>		
羊毛を使った糸紡ぎ	19世紀のフランスでは男女子ども達が糸紡ぎによって生計を立てていた. その技術の初歩を学ぶプログラム.	
私たちと遊ばない?	昔の子どもは日常生活を小さな遊びで過ごしていた. アラメゾン, アレコール, アレスタミネなどの様々な遊びを体験する.	
美しい木	村の木を使った伝統, 特にろくろを回す職人がどのようにろくろを回すかのデモをする.	
昔のガラス職人	ガラス作りのアトリエで実際に職人の作業工程にお手伝いとして参加して, グラスを作り上げていくプログラム.	
田園地帯と昔の専門職	田園地帯の民家に訪問し, 農家で暮らす際に必要な行動知識, その地の特産, 将来的な可能性について学ぶ.	
世界に誇る	探検隊に姿を変え, 高貴な誇りを胸に情報をかき集めてくる. そうすることで地域の個性や特徴が掴める.	
4月の月	秋に3日間の修学移動をすることで, アヴェノバの季節や土地に親近感をもってもらうプログラム.	

表3 フルミ・トレロン・エコミュゼの学習プログラム

赤字経営であったが, 経費削減と商業分野の活動に力を入れた結果黒字経営に転換した. 商業分野の活動とは, 具体には旅行の見本市への出展, ダイレクトメールや電話による広報, 旅行関係者用のツアーの実施, 新聞記者への案内, 専門分野の雑誌への広告掲載などが挙げられる.

(2) 組織

エコミュゼ設立以前から現館長であるMarc GOUJARD氏を中心として, 学校, 退職した高齢者のアソシアション, 文化的な活動をしていたアソシアションなどが集まり, 地域の情報, 証言, 写真を収集する組織が形成された. これが, 後の古写真の収集・整理による学習プログラムの実施母体へとつながっている. この後, コミューンから産業遺産を購入してエコミュゼの展示を制作し, 活動にコミュニティも参加することとなった. 現在では, エコミュゼ全体がひとつの大きなアソシアションによって運営されている.

(3) 学習プログラム

フルミ・トレロン・エコミュゼの学習プログラムを表3に示す.

フルミ・トレロン・エコミュゼでは, 一般向けと子ども向けの2タイプの学習プログラムを設定している. 一般向けの学習プログラムは, エコミュゼ内の様々なサテライト施設の展示を用いた体験プログラムが中心である. 一方の子ども向け学習プログラムは, 導入部分でエコミュゼの館長が言うように「新たな可能性を発見していける能力や好奇心を持って物事に臨む精神, 創造力の豊かさに価値を置いた教育」を具現化したものとなっている.

特徴的なプログラムとして, フルミ・トレロン・エコミュゼでは子ども達が地域の古写真を集める活動をエコミュゼ設立以前から実施しており, 学校毎に「職人」, 「農業」, 「社会」, 「産業」, 「レジャー」などのテーマを決めて展覧会を開催していた. 1800人の子どもが古写真を収集し, これに地域の高齢者が解説や意味づけを行い, 地域の貴重な資料として整理するプログラムである. この古写真資料は, 15の展覧会を実施した後も学校の授業で使われており, 現在は当時の社会の様子や衣装の特性



などを読みとるプログラムに活用されている。古写真資料は30万点ほどあり、全てスキャナーでデジタル化した後に、希望者には返却している。デジタル化した古写真は、インターネットなどマスメディアでの公開は価値が下がるので絶対にしないという。

### ノール・パ・ド・カレ地方圏政府

エコミュゼを地方毎に管理する行政組織として、フランス全土でもエコミュゼに力を注いでいるノール・パ・ド・カレ地方圏政府の担当官にヒアリングを実施した。

#### (1) 国・自治体からの支援

地方圏では、1974年に制定された地方圏制度によって、エコミュゼに資金を提供し地域の文化遺産を保存する活動が開始した。資金提供は、活動プログラム、施設のメンテナンス、計画の3つについて行われるものである。施設のメンテナンスについては、その内容と予算額はエコミュゼから要求を出し、地方圏が受理する手続きをとる。策定された活動プログラムについては、地方圏からその内容に関する要求や制限を加えることはなく、提出当初と実施内容が整合しているか確認するにとどまる。これらの資金提供に関する計画および契約は、エコミュゼと地方圏の間での「協約」という形をとり、その達成のみが地方圏からエコミュゼに課す義務となる。

#### (2) 経営

エコミュゼ設立のプロセスにおいて、ノール・パ・ド・カレ地方圏政府は計画の主導権を持たない。文化による地域振興を目指しているものの、そのために地域の人材を発掘するなどの作業を地方圏政府がするわけではない。地域産業の経営者や労働者を中心として設立運動が起こり、この発起人がエコミュゼのソフトを計画し、建

設費用が必要になった段階で地方圏政府とコンタクトをとる。この時、地方圏が支援する基準は定まっておらず、認可に向けては計画の合理性を第一とする。設立資金が算出された後は、都市共同体が資金を持っている場合はそこから提供させ、持っていない場合は地方圏から資金を提供することとなる。ただし、地方圏からは投資費用は出さず、活動費用は出ない。

#### (3) 組織

ノール・パ・ド・カレ地方圏政府でのエコミュゼに関する担当部署は、人材雇用を人事局や文化局が担当するほか、4000ユーロ規模以上の見学に対しては考古局から補助金がつく。また、臨時展に関する観光は観光局が、技術についてはハイテク局が担当する(図7参照)。中でも文化局はフランス国内の全ての地方圏にあるわけではなく、ノール・パ・ド・カレ地方圏の特色であると言える。他の地方圏の文化局では文化財などの補修に多くの予算を使うが、産業構造の悪化による雇用対策として文化による地域振興を目指しているノール・パ・ド・カレ地方圏政府では、ダンスや劇場、エコミュゼなど生きた文化に対してフランス国内で最大の文化予算を執行する。このような投資に対してノール・パ・ド・カレ地方圏政府は、エコミュゼの活動記録の確認やカタログ販売数の評価はするものの、「文化は数字で表せない」として採算性を求めている。

## 文 献

コリン・コバヤシ (2003) 「市民のアソシエーション—フランス NPO法100年」. 303p. 太田出版.  
 大原一興 (1999) 「エコミュージウムへの旅」. 183pp. 鹿島出版会.  
 新井重三 (1997) 「エコミュージウム理念と活動」. 301pp. 牧野出版.  
 新井重三 (1995) 「実践エコミュージウム入門」. 171pp. 牧野出版.

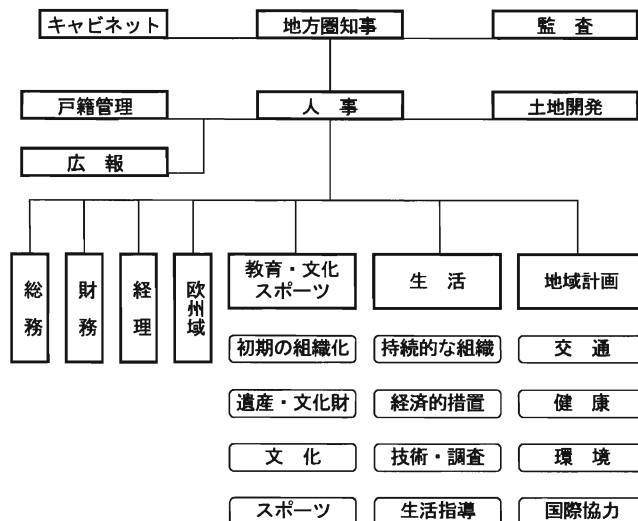


図7 ノール・パ・ド・カレ地方圏政府の組織図